

中崎宜弘著<旅とデザイン ウイスキーから人、空間構想へ>

コロナ禍のお陰、図書館の閉館が一か月を過ぎたいま、またもう 20 日間も延長になった。なんと 2 か月近く本が借りられないという困った日々が続いている。「オレの本棚に 読みたい 本が 無いものか」と中崎さんの本にいきついた。

中崎さんはオレより 5 歳くらい年下の人。知り合ったのはオレが 40 歳ぐらいだった、それ以来着かず離れずだったが、3 年ほど前、展覧会の案内状を出すと娘さんから、「父は 亡くなりました」とメールで連絡をもらった。彼も街で何度か展覧会をしている、その都度観にいったと思う、サントリーのデザイナーだとは知っていたが、絵はなかなかよかった。軽く流しながら切り口の鋭い彩色、骨太の絵だった。

本をめくると、デザイン作品の図版のコメントがふってある。そのコメントの中に社長との会話がいくつも出てくる。

社長「葡萄の葉、もっときっちり描けよ」

中崎「これは葡萄の葉ではなく、葡萄の葉の影です」

「それ早よ言えよ」社長に返された。

佐治恵三社長：先日、サントリー（明治後期創業）のドラマを見た。サントリーの山崎醸造所は電車で茨木から 5 駅ぐらい京都寄りにある。子ども時代からその建物やら看板はいつも見ていたので、なじみが大きい。日本のウイスキーが世界の四大ウイスキーの仲間入りをしていると知ったときには驚いた。

ウイスキーの製造会社は日本ではまだまだ歴史が浅く、100 年ちょっと、ビールも明治初期に札幌麦酒醸造所なんて文字が見られるので 150 年ぐらいかな。

日本酒の歴史は古い。焼酎は蒸留酒で、室町時代に伝わったとされる。縄文人も酒を飲んでいたので、という話が、先日読んだ本に出ていた。

◎大隅風土記：加熱したコメを口の中でよく噛み、唾液に含まれる酵素で糖化し、野生酵母によって発酵を進める「口噛みの酒」です。

◎記紀：スサノウがヤマタノオロチを倒すために酒を造らせた。

中崎さんのデザインの中には、サントリー製品のものが多い。ビールやウイスキーの器は、もうすでに決まったものがあるのではと思っていたが、季節もの、地域イベント物、といろいろあるようだ。缶ビールのデザインも爽やかなものから旨そうなものまで目を引く。同じようにウイスキーの器のデザインも斬新なもの、ちょっとと思うもの、いずれにしてもなかなか上手いデザインだ。

Suntory Reserve 失ってしまった“こだわり”を探す旅。

「リザーブを透明瓶にしてみতেくれへんか」というトップからの依頼が、口伝のままに、要請、命令という形を変えつつ、まだ大阪デザイン室の一角にあった乱雑な僕の机の上にドスンと落ちてきたことに始まる。<略>物を創り出すことは、まず夢を見ることからだと思う。リザーブの姿を想う場所。頭の中に描くためのスペースを、僕は自分の机の上でなく、「サンボア」（バー）にすることに決めた。<略>棚にはいろんなスコッチが一本一本整然と位置し、<略>「角」「オールド」そして「リザーブ」。ある年代以上の人は、「サントリーウイスキー」を語る時、少し遠くを見る表情になる。「角」「オールド」といった歴代のウイスキー瓶の背景には、必ずセピア色の思い出と自分の姿が立っているのが見えるに違いない。

「ちょっと 聞いてくれ 大きい声では 言えないよ」「そらあ 自慢たらしう かっこうが 悪い」「そつと
 いうぜ もっと耳を こっちに 貸せ」「実はな 昨日 できあがった絵 うまいくいった 最後の一笔 ピツ
 タリ決まった いいのが できあがった スカッと したぜ」

一か月ぐらい前に描きはじめた絵、116 x 91 c mの大きさの絵。

一回目：青色の絵の具（Cobalt Blue）をボールに取る、絵の具は指半分ぐらいの量。（鉄製の椀：実は内緒だけ
 れど、これはお好み焼き用椀、その取っ手をぶちぎり、5個ほど使いまわしている）絵の具の入った椀に
 糊（Gel）を同量ぐらい入れ、水をたっぷり入れて混ぜる。この時、水加減が難しい、多すぎるとキャンバスの上
 で絵の具がだらだら流れ、ねらった場所に色が入らない。水が少なすぎると、ぼつたり絵の具の色が主張しすぎ
 る。巾10cm ぐらいの筆にたっぷり水っぽく絵の具を含ませ、「それえ～え」と描いていく。こことこことに青を
 置く。キャンバスに定着した絵の具は思った場所に、思った盛り上がりで、流れ滲むこともなく留まっている。
 この段階で乾くのを待つ、じっと見ているでもそう簡単には乾かない、一日待たなくては乾かない。

二回目：絵は壁に吊られて何日か経った。「ブルー に ブルー かな」季節は新緑、外の緑は、緑みどり、萌え
 ている。陽の光が暖かい。日の出もどんどん早くなり、朝の8時には窓からの光が、空の青が、相変わらずのカ
 ラスめの声が、それぞれににぎにぎしい。「ブルー に ブルー の前に ピンクを入れるか」Quinacridone
 Magenta(キナクリドン・マゼンタ：クリムソンより柔らかい)という色がある。えんじ色の系統、見た目は黒い
 赤色だが、そいつを薄めるとピンク色になる。絵の具も国産のものは使い慣れた名前がついていたが、最近の外
 国の絵具、聞きなれない名前が多い。国産の絵具会社も同じように聞きなれない名前をつけだした。キナクリド
 ン・マゼンタを椀に、大豆ぐらいの量、相当水っぽくして、画面に刷く。多すぎたかなと思われるところは、布
 で拭く、絵の具が吸い取られ、淡いピンクが残っていく。

三回目：一回目と同様に、ブルーで攻める。このブルーは、Ultramarine Blue(ウルトラマリン)をつかう。この色
 についてひとくさり。「ウルトラマリン」は「海を越える」という意味。EUでは、アフガニスタンから海を越え
 てやってきた顔料：ラピスラズ。フェルメールの使用は有名。顔料の価格は金を凌いでいたとか。日本では群青
 色。このウルトラマリンをたっぷり椀に、次にジェルを入れかき混ぜる。ねつとりとした絵の具を太い筆で塗っ
 ていく。「そこだ えい それえへ」一回目のブルーの上に三回目のブルーが覆いかぶさっていく。

それから、緑色が入り、薄い墨色が入り、画面が複雑になっていったが、「ちょっと まとまらないね とりとめ
 がないね どうするべ・・・」こんな日々が続いた。「透明の墨色 その上に不透明のグレー どうかな・・・」透明
 の墨色とは、Paynes Gray(ペイニーズグレー)を水っぽくキャンバスに流している。その上に、白と黒の絵具を混
 ぜ、不透明なグレーを作り塗っていく。透明な部分と不透明な部分があいまってキラキラ輝いてくれたら成功な
 んだが、そう簡単にはキャンバスは微笑んでくれない。

「どうしたもんか なんだか 迫力が無いねえ よくないねえ あかんなあ」壁にかかった絵は何日も経った。

「太い筆に たっぷり 青色を含ませ 刷いてみるか」またもや Ultramarine Blue をたっぷり出し、そこに濃く
 しかもくすませるために Prussian Blue(プルシアン)を混ぜてみる。プルシアンは多すぎるとせつかくのウルトラ
 マリンが汚れてしまう、少なすぎると、効果が少ない、それこそ多からず少なからず、ころ塩梅がうまくいきま
 すように、箒で刷くように色を入れた。「どうかな・・・」乾くのに時間がかかった、じりじりまった、「どうだ ど
 んなもんだ・・・」半日まって壁に吊ってみた。下がってぱつと振り向いた。「よし やった いい」

- ◎「京奈和に乗るよ 無料区間だよ」「そういえば・・・乗ったことはないが・・・」25号線沿いに案内板が、右折と書いてある、乗ってみるとすいすい走りですが、すぐに下に降ろされ、またもや乗せられる。工事中の高速道路、走って見なければわからないことだらけ、茨木から2時間で待ち合わせの五條に着いた。
- ◎168号線から太尾登山口へ。1300Mまで車で上がる、ジグザグの道、落石の道、1時間弱で10時前に着いた。
- ◎登山口が1300Mということは、釈迦が岳1800Mまで400Mの高低差だ。楽ちんコースが予想される。3月に前鬼から登っているが、こちらは出発点が600Mということで標高差は1200Mもあった。直下で引き返した。
- ◎歩きはじめる、最初からのどかな道、平坦な道、しかも景色がいい。尾根道だけれどポコリンポコリン、象のせなかのなだらかさ、山の奥深さが感じられる。樹々が、草が、尾根道を指し示してくれる、これは山の奥の方に登らないとわからない。いくつも山を登る時は、麓からえっちらおっちら、乗越なり峠なりまで登っていく。そこまで登ると山の顔が一変する、樹々が草が、ようこそ尾根までと迎えてくれる。ところがここは、車を止めたところから階段を10段ほど上がると、いきなりポコリンの尾根道、樹々が草が尾根の姿になっている。うれしいねえ楽しいねえ。しかも危ないところがまったくないねえ、最初から山奥だ。
- ◎1時間も進むと向こうの尾根が見える、先日登った尾根だ。時間をかけてえっちらおっちらやっとのことで尾根にたどり着いたのが太古の森。なんとこちらは、ただら進むだけで向こうの尾根が見える、深仙のお堂と小屋の屋根がちらちら見える ポコリンの大日岳が見える、すぐそこじゃないか。
- ◎標高1500Mはまだまだ森林の中、鳥の姿をいくつも見た。昨日安威川の土手の外で体操をしていると、5.6羽がピーピーなく。「すずめじゃない」小ぶりで黄色や緑色が見えたような・・・今日は途中の林道を走行中、目の前をすいすい先導する小鳥、山の中では樹々の間をすり抜け飛び交う小鳥、濃いグレーの奴がピュッと飛んでいった。ハトの大きさの鳥もいた。鳴き声も聞こえる。尾根の上は風雨にさらされ、吹雪に翻弄され樹々が大きく育たない、冬は雪の世界だろう。そんな空を眺めていると、黒い鳥がへたくそにふらふら、「蝶ちよだ黒い蝶が ふらふら 舞っている」てっぺんでは、黒い蝶と茶のまだらの蝶が絡み追いかけあいをしていた。雌雄の姿が違う？縄張り争い？じゃれあっている？それとも交雑種を作ろうよ・・・
- ◎そうだ帰りに大きな蛇も見た。ヤマカカシかな、黄色っぽい色が感じられる。腹が膨れているのは蛇でも飲み込んだのか動きが鈍い。シカも濃い、ここの鹿は逃げない、不思議だね。
- ◎天気は、「曇り時々晴れ」という。青い空に白い雲が5.6割、陽が照ったり曇ったりだが予報通りに暑い。長そでシャツを着ているが、暑い。三宅さんは、「虫が嫌だ」と網を被っている。
- ◎古田の森がある1600M。前鬼からの乗越の峠は、太古の森という命名。由来を調べたが見当たらない。
- ◎水場がある。蛇口をひねった水量の水が斜面の奥から湧き出ている、これは天然湧水、残念ながら喉が乾いていないので少し掬って飲んだ、うまい。大嶺奥駆を歩いた時、ここの水場は使わなかった。12:30になったので水たまりのある場所で弁当を開いた。今日は卵焼きを作ってきた、イモサラダ、煮込みをいただいた、ペロリ完食、旨い。サンドイッチはてっぺんで喰った。相変わらずよく喰う、旨いね。
- ◎てっぺんにやってきた。観音さんがある、大きい。3月はすぐそこまで来ていたが引き返した。峠までが遠かった。そのてん今日はらくちんコース、「おお 観音さんだ」苦もなく登れた。
- ◎「釈迦が岳の観音さんは うっところが寄付した 名前が彫ってある」「ほんまかいな」そのことを見たかった。なんと書いてある、水嶋富三郎、帰って早速写真を水島家（今は島を使っている）に送らねば。
- ◎一等三角点がある。大正13年釈迦像は歩荷で上げたのかな、へりはなかったのでは・・・
- ◎山また山が連なっている、「あれは・・・?」「ひょっとして あれは 六甲山 神戸の街が北に・・・」
- ◎4時ころに車のところに帰ってきた、「おお いい山でした 楽しかった よかった」山行時間は6時間、往復の車の交通時間が8時間。十津川は遠い、次回はテントを担いでゆっくり泊まりたい、どこでもテントが張れそう。いい山だ、いい場所だ、気に入りました。
- ◎同道の三宅さんと別れ、8時ころに帰り着いた。彼は翌日健康診断らしい。

福岡伸一著<動的平衡>

この先生、大腸菌の話が面白い。大腸菌の話の前に、先生のコロナ談話を探してみた。ウイルスは生物だと思っていた、生きていて、石や鉄でないものは生物だと思っていた、まずそのあたりから・・・。

ウイルスは電子顕微鏡でしか見ることができない粒子だ。生物でもあり無生物でもある。

生物とは： 1) 身体と外界が膜で分けられている。

2) エネルギーを使って、生命維持活動をしている。

3) 子孫、複製を残す。

ウイルスは、2) の代謝も呼吸も自己破壊もないので、生物とは呼べない。しかし、微生物の中に入っている。

ということで、生物でいいのではと考える。

細菌は細胞構造を有し、適度な栄養・水分があれば増殖する。

ウイルスは遺伝子とたんぱく質の殻しか持っていない。遺伝子を持っているが組み立て設備を持っていないので、生きた細胞に寄生し、細胞が増殖するのを利用して増殖する。

ワクチンとは、予防に効果があり、感染リスクを下げるが、ウイルスをやっつける手段ではない。ウイルスは細胞の中に入り込むので、細胞に影響を与えずウイルスだけに効く抗ウイルス薬の開発は難しい。

インフルエンザ、おたふく風邪、風疹、麻疹、日本脳炎、エイズ・・・。

最近の研究で、多くのウイルスは病原性をもたないどころか、生物の進化に大きく貢献してきたそうだ。

母親の免疫系は胎児内の父親遺伝子形質を拒絶するのが普通だが、一枚の細胞膜によって母親のリンパ球は胎児の中には入れない。栄養分や酸素は通過する。この細胞膜がウイルスによって造られたことがわかったらしい。

ウイルスの振る舞いをよく見ると、自己複製だけをしている利己的な存在ではなく利他的な存在である。

奥野良信：ネットで中学・高校で一緒だった彼の文章が出てきた。2020年10月<大阪健康安全基盤研究所>

新型コロナウイルスは2002年に出現したSARSコロナウイルスと遺伝的に極めて近い。<略>COVID-19と呼ぶことになった。<略>新型コロナウイルスの特徴の一つは、三密で非常に強い感染力を示すが、市中での感染力は強くない。スペイン風邪やアジア風邪（これらも新型インフルエンザ）が出現した最初の年は、半年間で人口の約半数が感染したと言われている。毎年インフルエンザでも日本で1000万人以上が感染する。新型インフルエンザも季節性インフルエンザも感染力に大きな差はないが、検査で無症状の感染者も発見できる。今は無症状の感染者も隔離対策をとっている。大規模検査を実施し、感染者を発見し、市中感染拡大のスピードを抑え、医療崩壊を防ぐことが重要。

新型コロナウイルスはSARSと季節性インフルエンザの両者の悪い面を持った厄介なウイルスのように感じる。季節性インフルエンザは上気道に感染するため流行拡大が極めて速い。その反面、下気道や肺で増殖しないため肺炎が少ない。SARSは主に肺で増殖し重篤な肺炎を起こすが、上気道での増殖力は弱く短期間で完全に終息した。新型コロナウイルスは、上気道でも肺でも増殖し、感染力が強いうえに、肺炎を起こす能力が高い。このウイルスが消えるとは思えない。

ワクチンは、最新の遺伝子操作技術を応用したワクチンは数か月で開発可能である。

奥野君のワクチンの話、それから8か月後の今、オレはアメリカ製のワクチンをうつ、7月早々には2回目が終わる予定だ。今はまだコロナ禍の真っ最中。東京、大阪などの大都会は、2度目の非常事態宣言が出ている。鬱陶しい期間がこんなに長く続くとは予想もしていなかった。ヒトと会えない、出かけられない、うっかり風邪もひけない、ちょっとでもおかしいと思ったら、「葛根湯」である、これは効くという笑い。友人の病院も、「うちは医療崩壊だ」と叫んでいた。無症状の陽性者も、隔離しないとイケないのかな。

福岡伸一著<動的平衡>

大腸菌の話の前に福岡先生のコロナの話、奥野先生のコロナの話が続いた。

大腸菌はちっぽけな単細胞生物である。人間の細胞とは複雑さにおいて大きな隔たりがある。<略>1980年以降生命科学の研究は一気にDNAへと焦点が移った。<略>大腸菌は、栄養と酸素と暖かさがあれば、短時間で倍々に増え、どんどんたんぱく質を作ってくれる。

人間は、分業した数多くの細胞からできた多細胞生物である。約60兆個ある。消化器官には、腸内細菌と呼ばれる微生物が多数生息している。その数は100~200兆個といわれるが正確な数字はわからない。数キロの重さである。乳酸菌や大腸菌が主体で、いずれも単細胞生物である。

あれれ、ひょっとして、牛や馬など草食動物は、草を大量に喰い咀嚼してドロドロになったものを微生物が喰い、その微生物を喰って消化することであの大きな体を維持していると思っていた。前に読んだ屠殺現場のあんちゃんの本に出ていたのでそう思い込んでいた。ちょっとまてよ、これはおかしいでは。同じ生物だから微生物を餌にすることはしないのでは。検索した、結果として、あんちゃんの説は半分正しかった。

人や犬、猫は草を有効なエネルギー源として利用できません。

牛は食べた草やデンプンを微生物の力を借り、発酵分解して酢酸、脂肪酸を作り消化されエネルギーになる。次に、微生物が死ぬと、微生物のたんぱく質を消化酵素によって細かくされ、アミノ酸として吸収される。

ぼ~っと空を見て、時空を離れてみると、日本人の文明なんてたかだか2000年。穴に暮らしていた縄文人が1万年。微生物君たちは気の遠くなるような大昔から地球に生存してきた、生きながらえてきた。頼んだわけじゃないがオレの身体の中にも彼らが巣づくっている、この歳になるまでお互いに生きているのだから大したトラブルはなかったんだろう。微生物君とのトラブルというのは、病気に罹るってことだよ。

消化器官は体内ではない、口やら肛門に通じる皮膚の延長のようなもの、そこに腸内細菌たちがわんさかいる、栄養はやってくる、暖かい、環境はいい、そこにコロニーをつくる。たんに寄生しているのではない、寄生なんて言い方は失礼だそう。侵入してくる悪玉菌が悪さを防ぐ、食物の中の成分を、人間が利用できる栄養素に変えてくれる、それどころじゃなくて、難しいことがいっぱいあるようだけど、そんな話は専門家に。。

オレは、「オレひとりで 生きているんだ 助けなんていらねえぜ」なんて威勢のいい啖呵を切るタイプの人ではない。とはいえ、かってなことを自由気ままに生きているのは事実だ。「助けなんていらねえぜ」というセリフの対象は、ほとんどのばあい人になると思うが、対象が動物や植物、虫や微生物となってくると、オレの範疇を超え宇宙を思わせる。宇宙という存在がオレと対等に共生や利益の共有なんてことを言うはずがないが、「オレが生きているんだから 宇宙さん こっちを見てよ オレが見ているんだから」こういう会話があること自体が時間の共有じゃないですか。

微生物は見えないからいいけれど、1ミリや2ミリ、見えるやつは嫌だねえ。昔から線虫は好きじゃない。うお釣りするやつが、ミミズやゴカイをちぎって針に刺す姿を見るだけで気持ちが悪く震える。腸内が皮膚の延長とはいえ、そういう類を触ること、そういうやつが近くを蠢くことだけでも嫌だねえ。すくいは極々小さく姿が見えない、感じないけれど、オレの体内に連中がうじゃうじゃ居ると思うと、体の芯からスーッとするねえ。

今日は夜、安威川河原に行った。毎木曜日には午後教室があるので晩飯を食って出かけてきている。まもなく夏至という季節なので7時過ぎでも薄明るい。安威川河川敷は、JRや阪急の線路が通る付近は夜でもひとりふたりの人が散歩やジョギングをしているが、今来ているあたりは人が少なく、昔は夜には来たくないところだった。4.5匹の野犬の群れは、昼間なら睨みつけていたが、夜は彼らに遭遇すると嫌だ。草ぼうぼう、真っ暗の中、殺人事件もあったようだ。ところが最近では夜でも人がいる、トラックがたくさん通り明るくなった、そんなこんなで来やすくなった。復路を走るところには、夜がほとんど暗くなってきた。「あれれ あれ キツネのような」細長い犬、しっぽの長い犬、オレの足音を聞いて土手を駆け上がっていった。「まさかこんなところに・・・キツネがいるわけないわな」少し進むともう1匹を見た。「まさか まさか こんな都会に キツネがいるわけがないよな」と思いながらも、土手上の草むらからオレをじっと見る彼を見ていた。餌付けされているのか逃げずに見ている。たまたま、夜釣りをしているアンちゃんに思い切って声をかけてみた。「キツネのようなやつ 見たんやが・・・」「ああ キツネですよ 土手外の 広い下水処理場に住んでみたい コンコン いうてますよ」「えええ やっぱり キツネなんだ ありがとう」大笑いして別れた。実は半年ぐらい前にも、暗いベンチのあるところでストレッチをしていたときに、ライトのシルエットに映ったやつを見た、「あの姿は 形は キツネ だが まさか 安威川に こんなところに・・・キツネがいるとは・・・」と誰にも言わずにいた。半年前の幻も 今日の2匹もほんま物のキツネ、安威川にキツネがいる、何匹かいるかな感激である。

ラジオを聴いていた。高橋源一郎という人が話している。本題に入る前にネットで先生を検索すると、見たことのある女の人が1~2年配偶者になっている。「ふ〜ん やるねえ」である。高橋先生、住まいする鎌倉をよく散歩をするという。たまたま妻と一緒にいくということで海岸を歩いていた、妻が貝殻を拾っている。知人に頼まれ貝殻を集めるためにゆっくり拾っているというので自分も貝殻を拾い集めた。家に帰って机の上に貝殻を並べその美しさに感動した。海岸に在ればなんとも感じない貝殻だけれど、違った場所に並べると美しい。

その話を聞いて、オレは先ほども言った安威川のベンチのあるところが頭に浮かんだ。オレが毎日行く安威川河川敷に、ベンチが四つ並んだ広場がある。その場所で、いつも決まった四つ目のベンチに、上着やら、水の入ったペットボトルやら帽子を置いてストレッチをする。その広場の床に30センチ角のコンクリートブロックが敷き詰めてある。そのコンクリートブロックは大豆の大きさの石ころをばらまきコンクリートで固めている。石ころは海の砂利だと思ふ、大きさは大豆ぐらいの丸まった石、白に茶に黄に、それこそ海岸にある石ころだ。ところがその石ころの間にたくさんの貝殻のクズが混じって固まっている。二枚貝も巻貝もある、ほとんどが白くなっている。その貝殻をいつも見ている、海を感じている、高橋源一郎の話を聞いて、「貝殻なら オレも」といっちょ呑みの話をしてみた。

またまたラジオの話。毎土曜日の午前8時から、NHKラジオ番組“山カフェ”を楽しく聞いている。今日は天気予報の話だった。この歳になってと笑われるが、今でこそ、山に行く前には何度も天気予報のサイトを開き、天気をチェックしている。若い頃は、少々の雨でも、「なんとかなるさ」それぐらいの気持ち、「二三日 山に入れば 雨の日もある わさ」というような感じで通っていた。いずれにしても山では、自然の中では、小雨でも嫌なものである。ましてや、一日中の雨だとか、きつい風、には閉口する。雪はいい、雪は雨具も身体も濡れにくい、ただ寒いだけ、この寒さが寄る年波で、「雪山 ちと寒い よそうか」てな感じで敬遠するようになってきた。ラジオの話、NHKの第Ⅱ放送で、「00は 風力00の北の風 00ミリバール」なんて音声を何度も聞いた。若い頃に飲み屋で山の話をしていた時に、「天気図 描けますか 描けない それは だめですよ」といわれたことがある。その方は大阪経済大学の理系の先生だったかな、今は顔も思い出せない。“山カフェ”のマスターである石丸健次郎さんも、夕方4時になるとラジオの短波放送で聞き耳を立て、明日のために天気図を描いていたそう。登山歴も30年を過ぎたが、天気図とは縁がなかったと感慨深い。

- ◎京都の地理は疎い。京都は縦横がはっきりしているならば 西大路から北大路に行けば、大原を通る 367 号線に行くのでは。おおよそわかってきたが、北山通というのもある。2 時間で 7:30 に坊村に着いた。
- ◎昔から山は早起き、3 時 4 時に朝飯を作って、4 時 5 時にライトをつけて出発、昼の 2 時 3 時には目的地に着く、というのがおおよその方々の山スタイルだった。オレは早起きがまったくダメ。澤山さんも山岳部出身なのにダメだったので、我々グループは出発が 7 時 8 時が普通だった。そんなオレも 5 時起きだ。
- ◎坊村の駐車場で靴を履き替えていると、向こうの車の人が話しかけてきた。ちょっと若いジジイ、鎌倉山の方に行く、沢に行く、とおっしゃる。「ヒルは」「いっぱいいる」車からスプレーを出して、「これで、一発」手に吹きかけてもらおうと、なんとしょっぱい塩水。次回はおれも用意しなくっちゃ。
- ◎一本目を登っている、エンヤコラどっこいしょである。針葉樹の樹林帯、空が見えないぐらいに薄暗い、シャツを 2 枚着ている。青空に白い雲、あれはウロコ雲というのか、青地に、てんてん、ひょいひょいと筆を走らせるだけでも表現していいのか。小鳥がピーチクパーチク囀っている。あのピーチクパーチクは聴いていて気持ちがいいが、「天敵に 居場所を教えるのでは いかがですか ピーチクさんたち」
- ◎1 時間ぐらいで小休止。「ここは 苔だ」思い出した、この苔はキレイ。ちょっとした鞍部、雨が降れば水が流れる、石を濡らす、苔がよろこぶ、見るオレも喜ぶ・・・か。1 年ぐらい前にも見たような、いつだったか・・・。
- ◎標識がある、「積雪期 無積雪期」右側は谷筋なので雪で道が埋まってしまう。冬道は復路で使ったが、雪庇ができるような尾根に近い場所だ。「夏道は谷筋はなかなかいいですよ 今日はこちらが見たくて武奈ヶ岳を選んだんですよ 薄暗い谷筋に木の葉がぐらぐら揺れるんですよ」
- ◎今は季節としては、梅雨の真っ最中、二日続けて晴れとはいえ地面はねっとり湿っている。急な所はつると滑りそうだ。今日はよく転ぶ日だ、帰るまでに四度転んだ、ぞりぞりすべってうしろ向きに倒れた、足場を間違え、スローモーションのように前にこけた、すっと滑ってしりもちをついた、今日のこけ方、スローモーションはなかなか絵になる光景じゃないですか。ただ危険なところは、慎重にも慎重です。危ないところは三点確保、四点確保、恰好なんてかまっていられない、“よっこいしょのどっこいしょ”である。
- ◎2 ピッチ半ぐらいで御殿山に来た。何度も標識に御殿山と出ていたが、ここが御殿山だと初めて知った。いつも元気いすいすい通過地点だった。ここから武奈ヶ岳への稜線が見える、ちょっと下って登り返すと木の生えていない草原の中に登山道が付いている。まもなく 7 月、夏前の季節、樹々の緑が色濃くしかも勢いよく、なので視界が悪い、空が見えない、まわりが見えない、景色が見えない、これには不満が残る、ごめんな緑くん、繁茂はいいんだが、せっかくの山の景色が・・・なんて言うてはいけない。
- ◎この山、往復のコースしか思いつかなかったが、すぐそのワサビ峠から、いつも行く中峠、コヤマノ岳というぐるりコースもありだねえ。谷筋があるので次回は塩水持参で行ってみよう。
- ◎まもなくてっぺんというあたり、この辺は樹が無い、森林限界というにはたった 1000M のところ、樹が育たないのはよほど風がきつい、冬には吹雪くんでしょう。福井県に近いこのあたり、熊が多い、雪が多い、とは言へ滋賀県のスキー場は雪不足で殆んどが閉店していつている。すぐそこに見える琵琶湖バレーも人工雪製造機が活躍しているのでは。
- ◎11 時にてっぺんにやってきた。暑いシャツは 2 枚着ている。下の方琵琶湖は大きく見えるが、日本海は見えない。晴れてはいるが白い雲の多い空模様だ。
- ◎てっぺんで少し早い弁当を広げた。去年作った梅干しが終わってしまった。早く晴れた日が続けば梅干を干さねば、あれが無いと山の弁当は味気ない。カッコーカッコーと鳴く、向こうの方にハト大の鳥が木の枝、地面、ホイのホイと行き来している。あれがカッコウなのかな。帰って図鑑を見ると正解のようであるが、ハトの大きさ、ハトに似た色。托卵の話が載っている、なんだあいつか ホトトギスより余程でかい。
- ◎ちょっと迂回してワサビ峠へと思ったが面白くない、草ぼうぼう、はっぱぼうぼう。引き返し復路を帰った。
- ◎教えてもらった花。みずき（白もやもや）、やまぼうし（白ハナミズキ似）、山つつじ（赤紫）、ササユリ（白）。

福岡伸一著<動的平衡>

大腸菌は、ひとつの細胞、ひとつの生命、単細胞生物である。そして子孫を作る時はオスもメスも必要でない。ただ細胞分裂して2匹に増える、もう一度分裂すれば4匹に、倍々に増えていく。

大腸菌は単細胞というけれど、気の遠くなるような多くの数の情報量を持っているらしい。たくさんの情報があり、子孫を残すにも、交尾や生殖や邪魔くさいことは要らない。栄養と暖かさがあれば生きていける、増殖できる、環境が悪くなって、世のなかが凍ってしまえば“死に体”で環境が良くなるまで生存できる。ものぐさ太郎にとって、「人生 これじゃ」と喝采するような素晴らしい生態だね。

ヒトの細胞は1日~年で寿命を迎えるらしい。先生の本に、「何日も前の約束は 今いなくなった細胞が約束したもので 今の私は知らないよ」とか、「腸内で活躍する細菌が寿命で死亡 日々の糞便の00%は彼らの死骸」なんて読んだことがある。

ヒトといえども、数多くの細胞の塊。その塊を制御する脳にしても、細胞の塊。「そんな隅々まで 責任もてませんよ 昨日の奴と 今日の奴が 別物に入れ替わっているだって・・・」笑い話の連続のような・・・。

福岡先生は、昆虫少年だったそうだ。男の子は少年時代に誰もが網と籠をもって蝶やトンボを追いかけた。かくいうオレも池で魚を掬う安物の網から、白く深い網を買ってもい駆け回ったことがあったが、そこまでだった。山仲間の澤山さんが蝶ちょう少年だと、チラリ聞いたことがあるが、オレが興味を示さなかったのか、それ以上の話はなかった。チョウやトンボを針に刺して箱に入れいくつも飾っている人の画像は見たことがある。

先生：ある大きな台風が通り過ぎた夜の翌朝だった。家の前の大きなアオギリの大木が根元から折れ横倒しになっていた。普段は目にすることのできない高い梢の部分が間近にあった。私は注意深く木の肌を見た。すると、そこにずんぐりとした小さな昆虫が張り付いていた。直径5ミリぐらいの楕円形で、緑色をしていた。短い触角をもつ頭、胸、腹があり、裏には華奢な足が6本あった。昆虫であることには間違いない。昆虫少年の常として、私は昆虫図鑑の端から端までほぼすべて諳んじていた。<こんな虫は見たことが無い・新発見のチャンス・・・>先生は虫の入った瓶をもって、国立科学博物館に行ったそうだ。「これはありふれたカメムシの幼虫です」

先生のファーブルの話：ジャン・アンリ・ファーブルはフランス人。「ハムを細かく切って穴の開いた缶に入れ、それを鍋に浸して繰り返しスープの出汁をとる、そんな貧しい農村に育った」およそ200年前生れで、91歳で亡くなっている。日本でもこの時代、めざしと粥ばかりという話は聞く。今の飽食時代から見るとびっくりする非常識が、当時の貧乏人の常識だったと思う。「ぼろぼろの服や着物 食うものはこれだけ 汚い家潰れそうな家」こんな話は200年前でなく、オレの子ども時代もそうだった。敗戦直後生れには、貧しいは普通だ。

ファーブルは薄給の教員時代を経て55歳に安住の地を得て30年間、魂の記録が昆虫記だそうだ。

昆虫記を日本で最初に翻訳したのは大正期の無政府主義者：大杉栄である。何度か投獄の時間を利用して生き生きとした日本語訳を作り始める。全10巻の意気込みだったが大杉は憲兵隊に惨殺された。

◎ダーウィン：比類なき観察者

◎エドモン・ロスタン：哲学者のように考え、美術家のように見、そして詩人のように感じ且つ書く。

先生：21世紀の今、私たちは細胞の中にある細胞核のそのまた中に、幾重にも折りたたまれて格納されているDNAを開いて、端から端まで解析し、そこに記憶されているすべての部品=遺伝子を明らかにした。それで世界がわかったかのような錯覚の中にいる。

ファーブル昆虫記を図書館から借りてきた。コロナ禍めのお陰でほぼ2か月間、図書館が閉鎖されていた。こんなに永く続くとは思わなかったが、さっそく借りに行った。図書館には、大杉栄訳は無かったが、奥本大三郎と平岡昇の訳本を借りてきた。まだ読み始めてはしばらくだけれど、奥本大三郎訳は内容の中に、「日本では・・・」という内容がいくつも出てくる。100年200年前のフランスと日本のいろんなことがちぐはぐで、わからないことだらけ、通じないことだらけかもしれない、これはなかなか親切なことだ。

平岡昇訳に、最初の始まり、なんでこんな片田舎、なんでこんな歳で、ということが載っている。福岡伸一が言うところの、「ファーブルは薄給の教員時代を経て55歳に安住の地を得て30年間、魂の記録が昆虫記だそうだ。」というあたりから読んでみたかった。

パラパラ読みだしたところで、「あれれ ファーブル昆虫記は 彼の日記だね」 オレのブログと比べるのは、いかがなものかと思うが、昆虫のことを中心にまわりのいろんなことが出てくる、150年の時を超え、フランスの田舎町ということのを忘れ、彼自身が伝わってくる。

奥本大三郎：ファーブルは若い頃からなかなか優秀な人であったようだ。しかし、貧乏がゆえに昆虫学へは進まず、無償の師範学校を出て教師になった。61歳で妻を亡くし、その2年後に40歳下の村娘と再婚、91歳まで生きたがその妻も先に亡くなったとか。昆虫記を書き始めたのは55歳から。30歳の時たまたまアマチュア昆虫学者の論文を読み「そうか 生きた昆虫の行動について調べるとい研究分野があるんだ」と感動したそうだ。当時の昆虫学は分類学的研究が主だった。

55歳から過ごしたのは、フランス南部、アヴィニオン近郊。1エーカー（100M四方）の土地を手に入れた。前から欲しかったもの、あまり広いものでなく、囲いがあり、街道から離れ、見捨てられた土地、作物は採れないが、タンポポや虫たちにはお気に入りの土地、これこそ私の希望、私の夢だった。

あなた方は、虫の腹を裂いておられますね。だが私は、虫を生きたまま観察していますよ。あなた方は虫をいやらしいもの、可哀そうなものにしていきます。ところで私は、虫が好きになるようにするのです。あなた方は虫を拷問したり、細切れにしたりする仕事場で働いておられる。私の方は、セミの歌を聴きながら、青空の下で観察しています。あなた方は細胞や原型質を反応薬で試しておられる。私は本能のいちばん高尚なあらわれ方を研究しています。あなた方は死体を研究しておられるのに、私は生きた身体を研究しているのです。

「何時になったら、生きた虫を研究できるフランス国の昆虫研究所が生まれるだろうか。」この小さな生き物どもの、本能、修正、暮らし方、仕事ぶり、闘い、繁殖などの研究を目的とした研究所が・・・。農業と哲学が真剣に取り組まなくてはいけない。葡萄畑を荒らす虫どものことがわかることが大切だ。

そうとう昔の人だと思っていたが、亡くなったのは日本の大正時代、と聞くと、最近まで生きていた人なのかなとも思ってしまう。ネットでは、ファーブルはフランスでもヨーロッパでも無名だと書いてある。ファーブル昆虫記を一番読むのは日本人だそうだ。日本人の多くは、虫の声、鳥の声・・・幼いころから教えられ、聞かされ、親しんできた。虫の声がに關心があるのは、日本、韓国、中国ぐらいだそうだ。

残念なのは、虫嫌いの人は多くなってきている。嫌悪、憎悪の対象、「葉を撒け 追い払え」という昨今になってきた。山好きのオレも、蚊取り線香、虫よけスプレーなどは欠かせない。アリとアブの痒みはたまらん。